

# 令和八年度入学試験問題 国語（五十分）

二月三日 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は16ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 四、デジタル採点をします。解答は解答欄からはみ出さないように、濃くはっきりと記入してください。
- 五、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 六、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができたりした時は、手を挙げて監督の先生に知らせてください。
- 七、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。

受験番号

氏名

東京女学館中学校



一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

珠美が「恋人」に連れられてやってきたのは、中華街の片隅にある少し古びた中華料理店でした。見た目は決してきれいでありませんが、味は絶品で、「恋人」の父親がこよなく愛した店でもあります。「恋人」自身も幼いころから家族と通い、店の人々とも顔なじみですが、珠美にとっては初めて足を踏み入れる場所でした。

①「よかった、珠美にも喜んでもらえて」

今まで、さん付けで私を呼んでいた恋人が、初めて呼び捨てにしてくれた。そのことに気付かなかったふりをして、私はまた、小さなレンジに A スープをすくって口に運ぶ。スープの中にふかひれが入っているというより、ふかひれの周りにスープが絡み付いているような、それくらいとろとろで、おしみなくふかひれが使われていた。

「たくさん食べて」

言いながら恋人が足を崩したので、私も同じタイミングで姿勢を変える。同じ会社に勤めているけれど、私達が付き合っていることは、誰も知らない。恋人は、私より三歳年上で、営業の部署で働いている。

私は自分でどんぶりから小鉢にスープを移した。十月にもなると、さすがにこういう湯気の立つ食べ物に恋しくなる。

ふかひれのスープは、優しく優しく、まるで野原に降り積もる雪のように、私の胃袋を満たしていった。地面に舞い降りた瞬間 B 姿を消してしまうかのように、胃から体の隅々へ行き渡っていく。儂い夢を見ているようだった。美味しい物を食べている時が、一番幸せなのだ。嫌なこととか、苦しいこととか、その時だけは全部忘れることができる。

「なんでこんなに美味しいのかしら？」

レンジの中のスープをしみじみと見つめながら、つぶやいた。決して、味が薄いのではない。ベースには、 C したダシが効いている。そう、淡いのだ。

「風邪を引くと、ここんちのスープを飲ませてもらえるから、ちょっと嬉しくて」

「贅沢ねえ。でも風邪の時とか、確かにこのスープだったら、他の物が食べられなくても胃に入りそう」

「そうなんだよ。優しい味だから」

「本当に、穏やかな味がする」

スープを飲めば飲むほど、おなかに湯たんぽを当てているみたいに温かくなった。手足の先まで温かくなって、ほんのりと眠たくなる。

「珠美は、うまい物を食うと、本当に子供みたいな顔になるね」

そう言う恋人だって、会社でイライラしている時とは別人だ。

「お互い様でしょう」

私達は、美味しい食べ物で結びついている。

ほとんどスープがなくなりかけた絶妙のタイミングで、ぶたばら飯が登場した。

「これが、親父がこよなく愛したぶたばら飯だよ。家族で海外に暮らしてた時も、ぶたばら飯が食いてえ食いてえって我がまま言っつて、お袋が困った。うちのお袋も料理の腕はプロ級なんだけど、ここのは絶対に真似できないって」

ふかひれのスープ同様、こちらも大きなどんぶりに山盛りだ。知らないで一人一つずつ頼んだら、大変なことになってしまう。また、恋人がよそつてくれた。白いご飯の上に、煮込んだぶたばらと熱い葛あん、色を添える程度に小松菜がのっている。

「美味しそう」

小鉢なのに **D** 重たい器を渡されて、私はしみじみと感嘆の声を上げた。あんは艶々と光っていて、熱で形をなくした寶石のように鈍い餡色に輝いている。

「いただきます」

心を込めてつぶやいた。

もう、感想を言葉にする余裕すらなく、とにかく目の前の食べ物と早く一緒にいたいようなもどかしい気持ちで、何度も何度も白いレンゲを口に運ぶ。ご飯粒にはしっかりとした弾力があり、何か独特な香辛料の効いたあんが絡まっつていて、**②**唯**①**無**②**の味になっていた。ご飯にあんをかけたただけだって、もう十分ご馳走なのに、メインのぶたばらと言ったら……。世の中に、こんなに美味しい物があつたのだろうか。大きな固まりなのに、レンゲでスーッと切れるほど柔らかく煮込込である。肉の繊維

の一本一本にまで味が染み渡っていて、食べ物というより、芸術作品を口に含んでいるようだった。食べていると、とても優雅な気持ちになってくる。

「どうやら、気に入ってもらえたようで」

黙々と食べていたことにはつと気づいて顔を上げると、恋人がうんと目を細めて笑顔で私を見つめていた。

「ここは、いまだにガスじゃなくて、コークスっていう燃料を使っているんだって。だから、火力がものすごく強いから、こういう煮込みなんかも、美味く仕上がるらしいんだ。親父も、この店でだけは、一食まるまる同じ店で食って堪能してた」  
「当然でしょう」

自分で二杯目のおかわりをよそう。おなかは、もうほとんど満たされていた。それでも、まだいける感じだった。結局、恋人は四杯、私は三杯食べた。最後は、あまりにおなかが悪くて、スカートのボタンがはちきれそうになってしまう。

「もう動けないかも」

幸福な余韻をたつぷりと滲ませ、ため息をこぼす。恋人と一緒に小さな筏に乗って、ゆらゆらと漂いながら満天の星を見上げているような気分だった。

あんなにたくさん入っていたどんぶりにはもう、米粒一つ残っていない。すべて、私と恋人の二つの胃袋に収まった。恋人が目の前にいないのなら、姿勢を崩して、そのまま畳の上に寝そべりたい。

すると、お茶を一口含んだ恋人が、とつぜん正座になり、神妙な表情を浮かべた。その沈痛な顔を見ていたら、ふと、自分が何かとんでもない失態を犯してしまったのかと思い、私も同じように姿勢を正した。もしかして、恋人に嫌われることでもしてしまったのだろうか。

「えーっと、今日は珠美に、話したいことがあってさ」

恋人が、ますます緊迫した表情を浮かべる。私はとっさに、別れ話かもしれないと思った。きっと私のことが不憫で、最後に美味しい食事をご馳走してくれたのかもしれない、と。

「来年からカナダに行くことになったってことは、この前話したんだけど……」

恋人はゆっくりとした口調で話し始めた。

その前に別れてほしい、ということだろうか。恋人がますます苦しそうな顔をするので、私は見ていられなくなった。半年間でも、いろいろな店と一緒に行って食事をした。それだけで、十分楽しかった。恋人に何を言われても、もう覚悟は出来ている。すると、

「珠美も一緒に、来てくれないかな？」

驚いて顔を上げると、恋人が顔を真っ赤にして私を見ている。

「僕と、結婚してくれないだろうか」

「えっ？ だって……」

そこまで言って、また俯いた。

「わかってるよ。でも、全部承知で、プロポーズしているんだよ。あいつのことが忘れられないなら、ただ一緒にご飯を食べるだけで構わないから。珠美といると、幸せなんだよ」

半分、泣きそうな声だった。

前に付き合っていた私のボーイフレンドは、交通事故である日とつぜん私の前から姿を消した。同じ会社の人だったから、恋人もそのことは知っている。だからもう何年も、誰とも付き合っていなかった。あんなことがあってから、はじめて付き合ったのが恋人なのだ。

うなだれたまま瞬きをした瞬間、ぼたぼたと、両方の目から涙が一滴ずつこぼれた。④ 様々な思いが、胸の奥で弾けた。

「親父の遺言なんだ。嫁さんを選ぶ時は、この店の味がわかる相手にしろよって」  
その発想がおかしくて、思わず顔を上げ、くすつと笑ってしまう。

「おもしろい遺言ね」

笑顔のまま、頬についた涙を拭いた。

「全くだよ。でも、僕もそう思うんだ。一緒に美味しい食事ができる相手が一番いいってね」

「だけど、それだけで決めちゃっていいの？ 他にも、いろいろチェックしなきゃいけないことがありそうだけど」  
すると恋人は、ふふふふとおかしそうに笑い、

「それはもうチェックが済んでるから」

と続けた。何のこと？ と私は目でたずねた。

「お袋がよく言うんだ。パートナーを決める時は、一緒に食事をしろって。それで、残さなできちんと食べる相手だったら、財布を任せても大丈夫だって」

「まあ」

確かに、そのチェックポイントから言えば、私は合格点かもしれない。

「ありがとう」

たくさんの意味を込めたつもりで、私は答えた。もしかしたら、本当にこの人だったら、私がもう余生だと思っていた人生を、自分が主人公になって、また一から始められるかもしれない。もちろん、このタイミングでプロポーズされたのには驚いたけれど、私も秘かに心のどこかで、恋人といつまでもこうして向かい合っていていられたらいいと、夢見るようになっていた。

「でも本当に俺でいいの？ 出発まで、まだ少し時間があるから、珠美もよく考えてみてよ」

私がプロポーズを受け入れたということは、表情から伝わっているのだろう。珠美と呼ぶ恋人の声が、耳の底に心地よく響く。「そうね、ちゃんと一生美味しい物を食べさせてくれる相手かどうか、見極めなくちゃ」

少しふざけて、そう答えた。

好きな人と何気ない会話をするささやかな幸福を、久しぶりに思い出した。一瞬、大きな感情が吹き荒れそうになる。声を上げて泣きわめきたいような、そんな感じだった。けれど、おながが満たされすぎていて、私はほんやりと恋人を見ているだけで精いっぱいだった。

（小川糸『あつあつを召し上がれ』所収「親父のぶたばら飯」より）  
※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 文中の A  D  にあてはまる語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二度用いてはいけません。)

ア すーっと      イ しつかりと      ウ たつぷりと      エ ずっしりと      オ くつきりと

問二 — 線部①「今まで、さん付けで私を呼んでいた恋人が、初めて呼び捨てにしてくれた」とありますが、「恋人」はなぜ、この日に初めて珠美を呼び捨てにしたのですか。その理由を本文全体の内容を踏まえて、二十字以内で答えなさい。

問三 — 線部②「唯  無 」の  に漢字をあてはめて四字熟語を完成させなさい。

問四 — 線部③「恋人と一緒に小さな筏に乗って、ゆらゆらと漂いながら満天の星を見上げているような気分」とありますが、その説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先行きが見通せない状況に不安を抱えながらも、「恋人」と未来を思い描いて明るさを感じている気分。

イ かつてのボーイフレンドを失ったことに孤独を感じつつ、そばにいる「恋人」の存在にあたたかさを覚える気分。

ウ 「恋人」と二人きりで大切な時間をいっしょに過ごすことができ、夢の中にいるように満ち足りている気分。

エ 明るい将来を思い描いて、「恋人」と肩を並べて過ごすことができ、ゆったりと落ち着いている気分。

問五 — 線部④「様々な思いが、胸の奥で弾けた」とありますが、このときの珠美の心情を説明したのもっとも適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 突然の言葉に別れを切り出されるのではと恐れた不安が一気に安堵へと変わり、過去の悲しみを忘れて「恋人」との未来に希望を抱いた。

イ 思いがけないプロポーズに涙しつつも、過去のボーイフレンドを失った悲しみを思い出し、戸惑いと喜びが入り混じった気持ちで胸がいっぱいになった。

ウ 恋人の言葉に驚きつつも、今の自分には応えられないと感じ、過去への罪悪感と現在の戸惑いが入り混じり、幸せよりも迷いが強まった。

エ この店の料理のおいしさや温かさと家族の思い出を重ね、穏やかな食卓を守りたいと願う気持ちが結婚への思いと結びつき、その決意が固まった。

問六 — 線部⑤「私がもう余生だと思っていた人生」とありますが、これはどのような人生のことですか。本文の内容を踏まえて三十字以内で説明しなさい。

問七 — 線部⑥「大きな感情」とありますが、どのような感情ですか。十五字以内で具体的に説明しなさい。

問八 「恋人」がプロポーズの場としてこの中華料理店を選んだ理由として、本文の内容に合わないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母から「残さずきちんと食べる相手なら信頼できる」と教えられていて、珠美がその条件に当てはまると感じたから。

イ 父がこよなく愛し、海外にいた時にも恋しく思っていた店であり、珠美も満足するはずだと思ったから。

ウ 家族との思い出が詰まっていて、この店であれば珠美にまっすぐに気持ちを伝えられると考えたから。

エ 「嫁さんを選ぶ時は、この店の味がわかる相手にしろよ」という父の遺言を守りたいと思ったから。

問九 この話を前半と後半の二つに分けると、後半はどこから始まりますか。後半の始まりの文の初め六字をそのまま抜き出して答えなさい。

問十 本文全体の表現の特徴について、もつとも適切な説明を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 食べ物の味や食感を豊かに描き出し、さらにその描写を通して人物の心情や人間関係を表している。

イ 主人公の過去の悲しみを繰り返し詳しく描写し、それを「恋人」の発言と対比することで物語を進めている。

ウ 「恋人」の外見や動作を細かく描き出し、珠美の心理的な成長や揺れを直接的に説明している。

エ 日常的な食事の場面と人生の大きな転機であるプロポーズを重ね合わせ、日常と非日常を対照的に描いている。

二次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

先生

おれ

もう先生きらいじゃ

おれ

きょう めだまがとびでるぐらい

はらがたつたぞ

おれ

となりのこに

しんせつにおしえてやっていたんやぞ

おれ

よそみなんかしていなかったぞ

先生でも 手ついてあやまれ

「しんじちゃんかんにんしてください」

とってあやまれ

これは、神戸市立東灘ひがしなだ小学校二年生のおおつか・しんじ君の詩である。(灰谷健次郎著『せんせいけらいになれ』から)  
鮮れつな詩だ。

怒りは純粹じゆんすいである。未熟だが、男らしい誇りほこ。誰でもが子供のとき経験した、「不当」への憤りいきじおだ。

ほとんど美しい表現。それは憎しみをふくまないからだ。憎しみは多くの場合、自己弁護である。この子は弁護しているのではない。激しい主張なのだ。

さらに、もしあなたがよく読みとれば、この憤りには強烈な愛が裏づけられていることに気がつくだろう。

告発が詩のかたちをとったのは、いわゆる言葉にならない感情を、この枠によってはじめてうち出すことが出来るからである。表現力を持たない激情、そのもどかしさが昇華され、表出されることによって、芸術が生み出されるのだ。

芸術論めいてしまったが、それよりも私はここで、子供と大人の問題を話したいのである。

この詩を読んで、先生に対してなんて失礼な、と抵抗を感じる人がいるかもしれない。だが先生だから、あるいは大人だから尊敬しなければならぬというのとは古くさい形式主義であり、およそ意味がない。

それよりも子供がこのように激しく、先生、大人に対して人間的に正当であることを要求している。その期待の純粹さに感動すべきだ。

大人といったって、誰でもがかつては子供だったくせに、どうしてこのように燃えあがった精神の痛み、そして歓びを、まったく忘れてしまっているのだろうか。「子供」が何か自分たちとは違った、特別な動物であるかのように、外から観察し、甘やかす、たしなめたりする。

私は、現代の多くの大人たちの、子供に対する態度に、納得がいかない。

子供は大人がご都合主義に思い描いているような「コドモ」では決してないのだ。

大人は子供に対して、ひどく油断している。「子供だから」「子供のくせに」という合言葉。

ところで、子供のほうはまさに逆である。大人に対して、はるかに誠実であり、鋭い。彼らは感受性において微妙であり、しかも意外に思慮深いのだ。そして一生けんめい、全力で大人を観察し、対応している。

大人はたしかに子供にとって、万能の神格である。だから体当たりするし、また大人になりたいと熱望する。しかしこの神はしょっちゅう子供を裏切る。

先日、NHKの番組で二十人ばかりの中学生と話があったことがある。そのとき、一人の子がこんなことを言った。

「お母さんはよく、よその子をひきあいに出して、『誰々さんをごらん。あなたも見習いなさい。』なんて怒る。そのくせ、ほくがよその家のいいことをうらやましがると、『ひとの家はひとの家、自分のうちは自分のうち。』なんて言うんで、頭に来ちゃう。」  
実際、非論理だ。親は自分では気づかないが、その言動はご都合主義で矛盾している。そんなことにも、子供は真面目に悩み、

絶望するのである。

親子こそ、かえってズレやすい。肉親だという安心感から、親はわが子に対しては不用心になる。家族制度にいやったらしさがあるすれば、その甘え、互い<sup>たが</sup>が人間として真剣<sup>しんけん</sup>に立ち向かわないで、枠の方によりかかってしまうことだ。なんとなくムードで惰性的<sup>だせい</sup>にやって、それがうまく効果をあらわさないと、とたんにヒステリックに高圧的になったりする。

子供は自分の考えていることを、まともに親にぶつけない。だが本当に親が率直<sup>そつちよく</sup>に受けてくれるかどうか、不安なのである。話そうとしても、何か自分の気持と親の受けとり方が、くい違ってしまう、という予感がある。

中学生たちはまだいろいろと親に対する不満を言いあっていた。その平気な口ぶり、態度に、私はかえって明るさとあたたかみを感じた。そこで私が家庭の形式主義のつまらなさについて言うと、一人の女の子がとりすました口調<sup>くちよう</sup>で、

「でも、親はやっぱり親だから、敬愛しないとイケないと思います。」  
と発言した。私は、

「おやおや、あなたはほくよりもずっとオトナだ。しかし、もしあなたが母親だったとして、自分の子から、親<sup>7</sup>だから敬愛するなんて言われたら、ガツカリでしょう。人間として尊敬し、愛されるならうれいけれど。」  
と突っこんだ。

その子は、アアそうか、と素直に納得した。輝<sup>かがや</sup>いた顔をうれしそうにほころばせた。

放送が終わり、そろそろとスタジオから引きあげるとき、二、三人の男の子がにこにこそばによってきて、

「ああきょうはとてもおもしろかった。——またやりましょう。」  
といった。

その友だち同士みたいな口調に、私は明朗に笑ってしまった。<sup>8</sup>

問題をぶつけあうとき、大人と子供は対等なのだ。子供は当然、未熟だ。しかしまともに精神がつかみあわなければならない。だが多くの場合、大人の態度はいやったらしい。そして、にぶい。子供にインタビューしたり、話しかける時の先生やアナウンサーの口調など、典型的だ。

おつかぶせたような、のみこんだような。いつでも一定の距離を置いている。保護者のような顔つき、決して、ムキになった

り、本質論をぶつける、まともに言争う、というように踏みこむことはしない。<sup>⑨</sup>一線を引いた向こう側からいやに寛大な調子で口をきくのだ。

「何々の問題について、いったい君たちはどう思うかな？」

「ああ、ナールホド。いまのはたいへんいい意見でした。ところで誰々さん……」

と、するりと交通整理をしてしまう。

わざと驚いた顔をしてみせたり、相づちを打つ。しかし決して本当の感動でないことが、はっきり表れている。その白々しさ、インギン無礼に、子供が気がつかない<sup>⑩</sup>でも思っているのだろうか。

子供に寛大ぶるなんて、ボウトクだ。<sup>⑪</sup>子供に対してこそ、ポーズを捨てて、正面から取組むのだ。大人が大人ぶれば、やがて子供も心得て、わざと子供を装う。マセた演技だ。もう切実な相互のぶつかりあいは望めないのである。

(岡本太郎『岡本太郎の眼』所収「不当への憤り——子供対大人」より)

※出題の都合上、一部、文章を変えたり、省略したりしたところがあります。

(注1) ボウトク……冒読。聖なるものや大切なものを汚したり、卑しめたりする行為や発言。

問一 ——線部①「『不当』への憤り」とありますが、ここで「不当」だとされていることは、どのようなことですか。詩の中で述べられている「不当」な状況を三十字以内で具体的に説明しなさい。

問二 — 線部②「強烈な愛が裏づけられている」とありますが、どのようなことですか。説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 激しい感情をぶつけられるのは、相手を信頼しているからであり、そこに強い愛情が感じられるということ。

イ 激しい怒りの感情は、もっと自分を愛してほしいという感情から生み出されると考えられるということ。

ウ 怒りの感情を相手にぶつけたのは、となりの子をかばうためであり、そこに思いやりが感じられるということ。

エ 相手に対する愛情が強すぎて、感情をおさえきれずに、理不尽に激しい怒りをぶつけてしまったということ。

問三 — 線部③「この枠」にあたるものを、文中から五字以内でそのまま抜き出して答えなさい。

問四 — 線部④「人間的に正当であること」とありますが、この詩の中ではどのような行為を意味していますか。十五字以内で答えなさい。

問五 — 線部⑤「現代の多くの大人たちの、子供に対する態度」とありますが、筆者が考えるこのような態度として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新幹線の中で、子供が走り回っていたが、親はにこにこ眺めているだけで注意をしようとしなかった。

イ ボードゲームを一緒にやりたかったのに、子供にはまだ難しいと言って、やらせてくれなかった。

ウ 近所にお使いにいっただけなのに、「子供なのによくできたね、すごいね」と、おおげさにほめられた。

エ お正月に親子で将棋を指したが、子供が負けて悔しがって泣いても、父親は大人げなく勝ち続けた。

問六 ——線部⑥「ご都合主義」とはどのような姿勢のことですか。この言葉の説明としてもっとも適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア そのときどきの都合やなりゆきによって、その場で態度を変える姿勢。

イ 相手の都合や態度にあわせて、気に入られるように態度を変える姿勢。

ウ どんなときでも、自分にとって都合のよい態度を変えようとしないう姿勢。

エ 周りの都合や考えを無視して、自分勝手な態度を変えないような姿勢。

問七 ——線部⑦「親だから敬愛する」とありますが、このような考え方を筆者は何と述べていますか。文中から七字でそのまま抜き出して答えなさい。

問八 ——線部⑧「私は明朗に笑ってしまった」とありますが、どうして「私は笑っ」たのですか。その理由としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 中学生の子供たちの、大人ぶって自分に声をかけてきた態度をさわやかで、愉快に感じたから。

イ 中学生の子供たちの、自分に対してまったく遠慮のない態度をすがすがしく、満足に感じたから。

ウ 中学生の子供たちが、ふざけて自分を友だち同士のようにあつかった態度をばかばかしく感じたから。

エ 中学生の子供たちが、「またやりましょう」といつてくれたことが、うれしくて、素直さに感動したから。

問九 ——線部⑨「一線を引いた向こう側からいやに寛大な調子で口をきくのだ」とありますが、大人のこのような態度を、筆者はどのように言い換えていますか。この態度に相当する言葉を文中から一語でそのまま抜き出して答えなさい。

問十——線部⑩「インギン無礼」とありますが、この言葉の意味としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 表面的には、ていねいで礼儀正<sup>れいぎ</sup>しいように見えるが、じつは尊大であつかましい態度<sup>たいど</sup>のこと。

イ 相手の気持ちや立場などまるで考えていないような、自分勝手に失礼な態度のこと。

ウ 一見、とても無礼なように見えるが、じつは相手のことを思いやった誠実な態度のこと。

エ 相手に対して、無礼に感じられるくらいへりくだって、大きな敬意を示している態度のこと。

問十一——線部⑪「マセた演技」とありますが、この態度は具体的にはどのような態度ですか。このような態度が描かれている部分を文中から五十五字以内でそのまま抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

三次の短文中の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- |   |                     |    |                  |
|---|---------------------|----|------------------|
| 1 | 新しい技術を使って問題をカイケツした。 | 2  | 世界イサンに登録される。     |
| 3 | ダイチヨウの病気にかかる。       | 4  | 三連勝して、決勝戦にノゾむ。   |
| 5 | 社会のハッテンに大きく貢献した。    | 6  | その事件の真相をチヨウサする。  |
| 7 | あつと言う間に日がクれる。       | 8  | カンメイにできる方法を考える。  |
| 9 | 態度のすばらしさにカンブクする。    | 10 | 新しい法律が国会でセイリツした。 |



